

第100号記念特集「日本保健医療行動科学会の来し方行く末」

「行動科学の行方 ～つなぐ学としての行動科学～」

会長 中川 晶（京都看護大学, ながわ中之島クリニック）

まずは、ある初老の男性患者の不安からはじめてみよう。彼の問題は鼻血である。ありふれた疾患ではある。おそらく彼も一度や二度の鼻出血では気にも止めなかつただろう。しかしこの数年来、春の訪れとともに始まり夏まで続くとなると話は別、毎日というわけではない。鼻風邪をひくと頻回に起こり始める。それでも2年くらいは、うっとおしいな位だったのが、海外出張で飛行機で気圧が変わると、高度が下がり始めると鼻がムズムズしだして、着陸時には大抵ティッシュで鼻血を押さえねばならないことが重なるようになると不安になり、耳鼻科で相談した。しかし原因となる異常は見つからない。自分でネットや本で調べて見ても皆目見当がつかない。しばらく止まっているのもう治ったかと思うと何の前触れもなくまた鼻からタラリと赤い筋を引く。

数年後とうとう仕事中に突然のタラリがきたかと思うと、次から次へと溢れだした。仕事で人と会話中だったので、彼は慌てた。「ちょっと失礼」とトイレに駆け込み鼻腔に即席で作ったティッシュのタンポンを詰めて、さらに鼻をつまんで10分止血してみたが、手を離すと血が溢れてくる。そのうち、もう一方の鼻孔からも溢れてくる。だからつまんだ右手を離すことが出来ず、身動きが取れない。便器の前に座り込んだまま、溢れ出る鼻血で便器の中は真っ赤。左手でトイレトーパーを破り何とか周りに跳び散った血を拭こうとするが、逆に血を塗りたくる始末。なすすべ無し。20分経ってもトイレから出てこないの、スタッフが「大丈夫ですか？」と声をかけてくれたが、声が出せない。溢れた鼻血は後ろ側に回り込み、後鼻腔から喉に流れ込みうまく声が出せない。不安と恐怖が頭をよぎる「オレはどうなっちゃったんだ」「どうすればいい？」ウロが来てるのが分かる。血だらけの口で、やっとのことでスタッフに「救急車を呼んでくれ」と伝えた。

勘のいい読者はすでに気づかれたかも知れないが、彼とは筆者のことである。この数年来原因不明の鼻出血で悩まされている。もちろん、血圧、凝固系、血小板はじめCT、MRIでも調べてみたが解剖学的な異常もなし。医者であり行動科学の専門家を標榜している筆者にしてこの体たらく。お恥ずかしい話ではある。しかし、原因不明で日常生活を阻害するような病気というのは、時として強烈な不安を伴う。

昨年の本学会は梓川先生が「当事者性」をテーマとされてたが医療行動科学会のターニングポイントになるのかもしれない。つまりこれまでは健常者の医療者が病者の心や行動を観察・省察するという方法的限界を越え、病者の側からの医療を病者が語るという斬新なやり方が示された実り多い学会だった。

しかし、当事者性が語られるだけでは、行動科学ではない、ここからがスタートである。筆者の思いは筆者だけではなかったようで、今回は安酸先生が、梓川先生のテーマを受けて「医療者が当事者性を持つことの意義を問う」という、まさに今後の本学会の方向性を指し示すような学術大会が開催されようとしている。本稿で筆者は自分の病気体験から始めたが、医療者が自らの病気経験に目を向けることが当事者性を医療に持ち込める良い機会だと思えた。つまり患者と医療者をつなぐ掛け橋が、すなわち「当事者性」なのではないだろうか。

医療行動科学とは本来このような場面で役に立つのではないだろうか。単に臨床現場での医療者の言葉や行動の指針を作るだけではなく、患者になるとどのように感じ、考えるものだという経験を内省的にとらえること。そして専門家として患者さんに対峙するとはどういうことなのかを考えていくことが医療行動科学の本来のあり方ではないだろうか。

医療が医学だけで成り立つような時代ではないことが誰の目にも明らかになってきている。周辺領域の強力な援用が必要な時代に入っている。近年は情報学やロボット工学、人工知能といった分野とも緊密な連携が必要になっている。

しかしどうも、医療と他分野の連携がスムーズでない。その理由はおそらくは医療独特の構造に起因するもの

だろう。サービス業は大抵、顧客満足度が提供者側にフィードバックされて更に洗練されていくという構造になっている。医療もサービス業の一種に分類されるが顧客満足度だけでは十分でないという理解が提供者側にも顧客側にもある。まんやかに病気という自然現象がどっかりと居座っていて、医療提供者にも顧客である患者にもどこまでこの病気がコントロール出来るのか判然としないところがある。医学はあくまで確率論でしかものを言えないし、患者は患者でうっすらと医学は万能出ないことを知りながらも、何とかするのが医療の責任ではないかという態度に出る。医療者は確実とはいえない世界（治療が効果的かどうかは確率でしかいえない世界）で苦しみながら「大丈夫ですよ」という言葉を使う。このような二重構造の世界では、他分野の知識がそのままの形で利用できない。これまで人類学・社会学・歴史学などさまざまな医療周辺分野の研究が医療に流れ込んできて、医療人類学・医療社会学など新しい分野が生まれてきて研究者も増えたが、果たして実際の臨床現場で活用されているかという点はまだ心もとない。つまりはまだ臨床現場と研究分野にはかなりの乖離があり、それを埋めて行く必要があるのではないだろうか。筆者は医療行動科学を「つなぐ科学」と規定したい。そして本学会が周辺領域と医療現場をつなぎ、患者と医療者をつなぎ真の人間学となることを目指したい。

< 過去（来し方） >

「ニュースレタークロニクル」

理事・広報委員長 馬込武志

いよいよ 100 号を迎えたニュースレター。創刊号から 100 号までの間にどのようなことを会員に伝えてきたのでしょうか。

ニュースレターは学会の情報発信のツールの一つでもあります。どのような情報を発信しているのかを見ることが、その当時の社会が、医療がどのようなものであったのか、あるいは学会としてあってほしいと考えていたのかが分かるのではないかと思います。

創刊号からすべては大変なので、下一桁が 1 になる号（1, 11, 21, …）の主に表紙に書かれていることを集めてみました。ただし、創刊号は事務局に所蔵が無かったため、創刊号の代わりに 2 号をあげております。

【良い医療を目指して 1990 年代】

1986 年に始まった本学会にとって、創始から 1990 年代までは、患者にとって良い医療とは何か、どうすれば患者にとって良い結果になるのか。そのためには、対病気ではなく、対患者、それも患者の行動に焦点を当て、行動変容をするのかを問い続けている十数年と言える。

それは、第 2 号で、患者の治療参加や第 11 号で望ましい食生活とは何かを問うこと、第 21 号で慢性病を抱えながらどう生活をしていけばよいのかということ、さらに第 31 号で看護師の養成カリキュラムに言及し、社会資源の開発ができることが目指されているという指摘からも分かる。

【医療の拡がり 2000 年代】

2000 年に入ると様相が変わる。エポックメイキングだったのが、第 41 号に掲載されている第 15 回学術大会報告である。大会長の上野轟先生は、眼に見えるものではなく、眼に見えないものを大切にすることの重要性を訴えられている。検査結果や画像を大切にする医療の営為の逆である。加えて、特別講演が「弱みを強みに」というテーマであった。

これは大げさに言えば、今までの概念が“転倒”している。シンポジウムでは「すこやか」をテーマにしているものの、その健やかさは、「医療従事者の」であったり、「癌患者の」、「病虚弱児の」と、従来であれば「すこやかさ」つながりにくいものどくつついている。

第 51 号では、大会報告であるが、歯科と医科、看護の連携の重要性を、第 61 号では、国際保健行動科学会議の大会報告がなされている。そのテーマは「健康と環境をめぐる教育」というものであった。

今までの医療の在り方が転倒することで、さらに医療についての考え方に、“医科だけでなく歯科”や“環境”、“教育”という多方面への拡がりを見せた年代でもあった。

【統合と支え合い 2010 年代】

2010 年代になると、拡がりを見せていた本学会の医療に対する考え方が、まとまろうとし始める。2010 年に発行された第 71 号は大会案内だが、そのテーマが「心と身体に効く支援技術と理論の統合」（傍点引用者）なのだ。これはちょっとした発見かもしれない。

第 81 号は、現会長の中川晶先生の会長就任のご挨拶である。そこには、医療がパラダイム転換を起こし、もっとオープンになる必要が説かれ、ご自身の専門分野であるナラティブアプローチやコーチングについても触れられている。第 91 号は、不肖馬込が本学会の権威主義的ではなく、互いにフォローし合い、高め合うという雰囲気について述べている。

これらは、支援するために、あるいは互いに支え合うために今までの知見を統合しようとする姿勢が表れているという言い過ぎであろうか。

2号から91号の表紙を分析することを通して、10年単位で本学会の医療に対する考え方が変化していることが分かりました。101号からの次の10年ではどのような変化を見せてくれるのでしょうか。

「終活中の私と保健医療行動科学会」

評議員 片山英雄

東京女子医大の故長谷川浩先生に声を掛けていただき、第2回発表会より入会いたしました。当時川崎医療短期大学で看護師を中心にした医療従事者養成のための心理学を教えていました。患者の心理を理解し、健康回復への助言・指導ができる医療従事者の育成を目指していました。

指導方法としてロールプレイングを取り入れ、その成果を本学会で発表すると共に、2000年には第27回国際心理学会議（ストックホルム）で発表することも出来ました。

退職した今は、自分自身の「終活」に専心している卒寿（数え年90歳）の老人です。高血圧をはじめいくつかの持病と付き合っている老人患者そのものです。研究者として学問的な成果を発表することはできませんので、最近感じている事を述べてみたいと思います。

死とどう向かい合うか？この問題は人類にとって永遠の課題です。人生の終末をどう迎えるか？これは医療だけで解決できるものではありません。特に宗教者の言葉に耳を傾けてみたいものです。

良寛禅師の地震見舞い「地震は信に大変に候。……しかし、災難に逢ふ時節には、災難に逢ふがよく候。死ぬ時節には、死ぬがよく候。是はこれ、災難をのがるる妙法にて候。注1」を一番に思い浮かべます。しかし、その後、じぶん自身が激しい腹痛を伴う下痢に悩まされ「……この夜らの 明けはなれなば 女(貞心尼)きて尿を洗はむ……注2」と歌をお詠みになっています。

この事は、仏教の始祖ブッダでさえ最後の旅に出て「さあ、アーナンダよ。私のために、二本並んだ沙羅双樹の間に、頭を北に向けて床を用意してくれ。アーナンダよ。わたしは疲れた。横になりたい。注3」と体力の衰えを訴えています。まことに一人の人間ではないのでしょうか。

幸い良寛の新潟県島崎にも、釈尊のインド、クシナーラーにも訪れる事が出来ました。さらに、行動で学びたいと、四国八十八か所歩き遍路にも挑戦し、3巡しました。達成感は十分あったのですが……。

すべての人間は「死」から逃れることはできません。このきびしい現実を見つめながら、私はどう進めばよいのか？私の終活は続いています。

引用書 蔭木英雄 著「良寛伝私抄」旭光社 1997 注1 p341 注2 p344

中村 元 著「ブッダ最後の旅」岩波書店 1980 注3 p125

「私が学会員を続ける理由」

理事 末松弘行

私の専門は「心身医学（心療内科）」です。先だってまで加入していた学会は、心身医学そのものでは日本心身医学会、日本心療内科学会、世界心身医学会、アジア心身医学会など、関連学会としては、（以下、冒頭の日本略）ストレス学会などの他、心身症の治療に関係しているサイコセラピー学会、自律訓練学会、認知・行動療法学会、バイオフィードバック学会、交流分析学会、精神分析学会、精神分析的精神医学会など、精神科にも関連があるので思春期青年期精神医学会、児童青年精神医学会、産業に関係して産業精神保健学会、産業カウンセリング学会、臨床心理士にもなりましたので心理臨床学会、その関係の描画療法学会、家族療法家族学会、養護教諭の育成にかかわりましたので学校保健学会、また、死の臨床研究会に入るとその関係としてサイコオンコロジー学会、そして最後に私の専門中の専門の摂食障害学会、関連した肥満学会など、その他にも発汗学会などもあります。そして、日本保健医療行動科学会（以下、本学会と略）があります。つまり、本学会を含めて40くらいの学会に入っていました。

東大を60歳で定年退職して、次の大学を70歳で、第3の大学は学部長をしたので80歳で定年退職した際に、それまで膨大な学会費を教授研究費でまかなっていましたが、それがなくなったので、いくつかの学会をやめることにしました。その時には10くらいの学会は会費免除の名誉会員でした。その他に会費を払いながらも続けることにした学会の主たるものが本学会です。

では、本題の「続ける理由」は为什么呢。心身医学は「全人的医療、チーム医療、セルフコントロールの医療」を目指します。本学会も同じところを目指しているように思います。本学会の創始者であられる中川米造先生は心身医学にも関心を持ってくださっていました。そして、心身医学関係者が学生のために創った「全人的医療を考える会」には当初から参画してくださいました。この会は、夏休みに3泊4日で医療関係の学生が全国から集まって全人的医療を学ぶもので、本学会の理事の先生方のなかにも、この会に参加された方がいます。米造先生は末期の黄疸がひどい状態でも、この会に来られて学生に話して下さったことを感慨深く思い出します。

第27回大会のテーマが「全人的なチーム医療」であったように、本学会には健康科学系（栄養学、薬学なども含む）、看護学系、歯学系、医学系、心理・福祉学系、社会学系（経済学、哲学・倫理学なども含む）など各分野の会員がいて、理想的なチーム医療を語ることができます。

また、第32回大会のテーマが「セルフケアを支援する」であったり、その他の学会でも「やる気」が取り上げられたりで「セルフコントロールの医療」を薦める機運があります。これらは私の専門の心身医学と共通しています。

もう一つ、「続けた理由」としては、ほとんどの学会は役員に定年制があるのに、本学会にはそれがなく、現会長の中川晶先生から80過ぎの私を理事に推薦して下さったりしたので、やめるわけにはいかなかった事もあるでしょう。中川晶先生も心身医学（心療内科）を専門の1つとされていて、ずーと以前から公私ともに、関わり合いのあるお方です。

本学会には当初から加入して、この30余年間、ほとんどの学術大会に参加してきましたが、いずれの大会も「わが意を得たり」の体験がありました。これらが、「私が学会員を続ける理由」でしょうか。

< 未来（行く末） >

「この学会に期待すること」

理事 大門恭平（岸和田リハビリテーション病院、京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程）

日本保健医療行動科学会の運営に携わり、約1年が過ぎました。この間に、4回の理事会に参加し、様々な諸先輩方と対話をさせて頂きました。その中で第一の印象は、開いた「こころ」を全ての諸先輩方から感じたことです。保健医療行動科学は病いの理解という視座で病者と関わるが必要だと考えます。その原点は、全ての事象に対する開いた「こころ」ではないでしょうか。

また、第二の印象は当事者性という視点での学会開催や、心理学、社会学、健康科学などを専門とする諸先輩方が所属されているなど、非常に多様性に満ちた環境であると感じました。

近年の日本国内においては、AIなどの先端技術の進歩や人口減少が注目されています。一方、それらが加速することで人と人との関係性やコミュニケーションがさらに大切になることは想像に難くないです。この様な社会の中で、我々はその「こころ」の準備をする時期にあると考えるべきではないでしょうか。

本学会が開いた「こころ」と多様性によって新しいテクノロジーや環境と融合し、今まで以上に病いの理解に貢献できることを期待します。

「この学会に期待すること」

監事 林 哲也（明海大学保健管理センター）

「私は、この学会に育ててもらったの。若手の不慣れな学会発表や論文投稿にも、育てる姿勢で温かく応援してくれる、この学会が好き。」

これは故橋本佐由理先生が生前よく口にされていた本学会への思いとして、ニュースレター第96号（2018年8月）「橋本佐由理先生を偲ぶ」の中でも紹介された一節です。

学生時代からろくに本も読んだこともなかった私が、思い切って社会人大学院に入学し、橋本ゼミの門を叩いたのは2014年のことでした。そして橋本先生に背中を押され、初めての口頭発表をしたのが、本学会の2015年京都看護大学での大会です。当時の私にとって「学会」という響きは、厳しく鋭い指摘や議論が飛び交う、雲の上のような空間を意味していました。そして強い緊張とプレッシャーを感じながら京都を訪れました。

しかし初日のシンポジウム、ワークショップ、懇親会と、あまりに温かく、笑いにも包まれた雰囲気、よい意味での拍子抜け？を味わい、翌日の発表に向けて「思い切ってやればいいのだな」と随分励まされました。も

ちろん発表は正に「不慣れ」でたどたどしい内容でしたが、多くの方々にアドバイスや感想を頂き、緊張と緩和、安堵の心境になったことを思い出します。

私は普段、不登校やひきこもりと言われる状況にある若者たちのサポートに関わっています。時に無口であったり、過大な不安を抱えがちな彼らの生活は、いわゆる「規範」の側からは、一般社会に「不慣れ」な若者と見られるかもしれません。しかし一方、彼らの社会を見つめる視点には、社会の本質を突く鋭さを感じさせられることも多々あります。それはいわば小さな「科学の芽」のようにも思うのです。

不慣れで、たどたどしく、粗削りであったとしても、その人の中にある小さな「科学の芽」を「育てる姿勢で温かく応援してくれる」。不器用な一会員として、そんな雰囲気の中で多くの縁と新たな知見が育まれることを期待しております。

「対話型A I ロボットの限界と今後の保健医療従事者教育」

副会長 諏訪茂樹（東京女子医科大学）

ロボットやA I に関して私は専門外であり、特に詳しいわけではない。しかし、某総合商社と某自動車メーカーとが共同出資して設立した対話型ロボット開発会社から相談を受けたのをきっかけにして、人間対人間のコミュニケーションと対話型ロボットの限界について考えるようになった。開発会社からの相談内容は、「どうしても人間の会話に近づけることができない」「文脈が読み取れない」「共感ができない」と言うものであった。

「けっこうです」を「すばらしいです」と捉えるのか、「いりません」と捉えるのかという、文脈から意味を理解する能力は、開発が進めばやがてA I ロボットも獲得できるであろう。また、3日間の予定で入院した患者さんから「いつ退院できますか？」と尋ねられて、単に「3日後ですよ」と応えるのではなく、「何かご心配なこともありますか？」と尋ねて援助につなげていく能力も、いつかは学習するかもしれない。しかし、そこに至るには何年かかるだろうし、どれだけ開発が進んでとしても、共感能力だけは獲得することができないであろう。

来談者中心カウンセリングを提唱したC. R. ロジャースによると、共感とは「クライアントの私的な世界を、あたかも自分自身のものであるかのように感じ取り、しかもこの“あたかも…のように” (as if) という性格を失わないこと」と説明している。つまり、一方で、相手と同じように感じながらも、他方で、その感情の意味を理性的に思考するという、複数の意識活動を同時に行うのが、ロジャースのいう共感なのである。

A I ロボットにはセンサーがあるので、相手の感情表出をとらえることはできる。しかし、意識を持たないので、相手と同じように感じることはできない。だから結局、「おつらいですね」と相手に返したとしても、口先だけの疑似的な共感になってしまう。また、唯一無二の存在である個人にとっての感情の意味は、どれだけ膨大なデータを検索したところで、分からないであろう。

そうすると、保健医療分野における専門家の育成において、今後、特に力を入れていかなければならない領域が見えてくる。専門教育の強化・充実の陰に隠れてしまった人間教育、豊かな心の働きを育む情操教育は、今後のA I 時代に欠かせないものになると思われる。

「ホーリズムや量子論の観点から健康行動科学の行く末を占う」

副会長 吉岡隆之

私は、これまで約20年間、看護系大学の教員として行動科学に関する授業を担当し、その授業の核心は、脳科学（特に「解釈モジュール（コラム）」）に基づく、ナラティブや行動変容のからくりについてでした。例えば「ナラティブアプローチはなぜ有効なのか」「アートセラピーはどういう点で優れているのか」などの糸口になるような内容です。私が大会長を担わせていただいた本学会の第33回学術大会（那覇）でも、同様の内容で基調講演をさせていただき、その内容をまとめたものが本学会雑誌第33巻第2号に巻頭論文として掲載されていますので、ご興味がありましたらご参照ください。

さて、上述の巻頭論文のおわりに「調和的なライフに向けて」という副題で自由奔放に今後の展望を延べましたが、本稿ではその続編として、さらに奔放に健康行動科学、延いては調和的ライフの行く末、さらには今後の文明を占ってみたいと思います。

上述の脳の「解釈モジュール」は、いわば人間特有の自己調和のためのメカニズムとも考えられ、内的あるいは外的な環境のどの部分を、どの範囲まで解釈（意識）するかによって、その調和のレベルが異なってくるように思います。どうも現代は、産業革命、資本主義的社会の台頭、科学（近代西洋科学）万能の時代を経て、極めて人間本位、自己本位な調和のレベルになってしまっているように思います（それが悪いという二極分化的な考

えではありません)。

近年、特に量子論、宇宙論、生命科学、意識研究などにに基づき「宇宙における万物は、すべてが相互に一貫性のあるつながりをもっており、全体として動的に調和している」という「ホーリズム」や「ホーリスティック」の概念が見直されつつあります。宇宙環境、自然環境、人工的環境も、さらに人間の精神や意識を含め、細胞、物質、極微の量子に至るまで、すべて(万物)が相互に一貫性のあるつながりをもって全体として動的に調和しているという考え方で。

ここからは私の経験や直感や感性を通しての占いのレベルの(非科学的な)話(エッセイ)として寛容にお読みください。この全体としての調和的なつながりの根幹は何なのかということですが「周波数(波動)の高い量子」が想定されます。この「周波数の高い量子」との響きあい(共鳴)の度合いが、万物との調和の度合いではないかと思います。もしかしたら、古来、「周波数が最高レベルの量子」を例えば「神」「虚空」「宇宙の根源」などと称しているのかもしれませんが。

量子について(私は専門外ですが)、熟知している人は誰もいないと言われているようですが、その仕組みが次第に解かれ応用されつつあるようです。量子は、粒子と波動の両者の性質をもち同時に複数の状態(状態の共存)をとることができる電子や光や素粒子レベルのミクロの物質やエネルギーであると言われています。したがって日常のマクロな世界では、確かにその現象はあるにもかかわらずほとんどみることにはできません。また、状態の共存とは、ある量子が複数同時に存在するというのではなく、確率的に(分身の術のごとく)複数共存し観測することによって初めてそのうちの一つがみられるようになる(状態が確定する)ということのようです。

このような量子論を、意識や心や思考と結びつけて考える研究者もいるようです。例えば、「万物は観察されて初めて実在するようになり、その実在は観察者の意識に依存する。」や「意識が量子(例えば電子)のもつ可能性の1つを選ぶことで、それ以外の可能性がなくなり選ばれた一つが現実となる。」などです。このような観点から、健康や病気も意識が具現化した状態と考えることもできるわけです。

保健医療分野では、例えば、欧米をはじめ多くの国で補完代替療法としてホーリスティック療法やエネルギー療法の名のもとで実践されている「レイキ(霊気)」でいうところの「愛と調和の波動(エネルギー)」は「周波数が極めて高い量子」に相当するのように思います。「生体エネルギー」や「性エネルギー」の強大さと重要性について詳細に言及している「タオ(道)」では「周波数の極めて高い量子」と共鳴し調和する方法を説いているように思います。あるいは「マインドフルネス」でいうところの「瞑想」も、いかに二極化的な思考から脱却し「周波数が高い量子」と共鳴し調和的な境地になるかということかもしれません。

愛や調和や性のエネルギーにしても、確かに感じ人間にとって重要と思われるにもかかわらず、ほとんど科学の範疇から除外されているのが現状ですが、今後はホーリズムや量子論の観点から、愛や調和や性のエネルギーを意識した実践的な感じる健康行動科学が次第に主流になるような予感もします。特に性エネルギーは、現代ではあらゆる宗教において除外されているように思われますが、この性エネルギーの強大さと重要性(特に女性性と男性性のバランスなど)について意識することも調和的ライフ(生命、生活、生涯)にとって重要かもしれません。

最後に、今回の新型コロナ(COVID19)を機に、良し悪しに関係なく世界中の大多数の人々の価値観やライフスタイルが変容し、これまでの分化的な文明ではなく、統合的な(もしくはホーリスティックな)新たな文明に急激に変容していくような予感もします。日本の食文化やアニメ文化などが世界に広がりつつあるようですが、そこに共通するような精神性やスピリチュアリティがその新たな文明の鍵になるような予感もします。

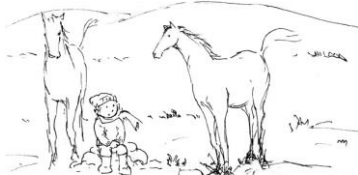
挿絵ギャラリー

これまでニュースレターに掲載された挿絵等(中川 晶 作)を一堂に掲載いたします。(web版はカラーです) 今号では第81号～第86号に掲載された挿絵15点を掲載しました(第87号以降は次号に掲載予定)。

No.81 (2013年8月号) より



No.82 (2014年1月号) より



No.83 (2014 年 3 月号) より



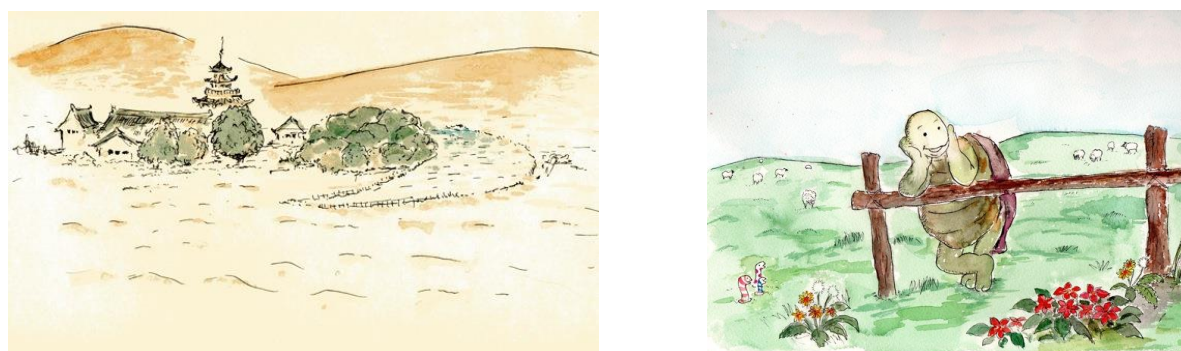
No.84 (2014 年 7 月号) より



No.85 (2015 年 1 月号) より



No.86 (2015 年 3 月号) より



●会員情報としての「e メールアドレス」登録のお願い●

本学会では、一部の情報（例えば、緊急の連絡、会費納入のお願い、ニュースレターに掲載する情報等の
先行案内や支部案内など）を会員の皆様へ e メールにて行っております。ここ数年、会員情報としての e メール
アドレス登録のお願いを本学会ニュースレターに掲載するなどして度々行ってきましたが、未だ e メール
アドレスの登録のない方や e メールアドレスの変更をお知らせいただいていない方がおられます。

今後（今年度中に）、web サイトでの会員管理システムを導入することになりました（以下の総会報告参
照）。その場合、会員の e メールアドレスの登録は必須となります。つきましては、お手数をおかけします
が、e メールアドレスを本学会事務局に必ず早急にお知らせくださいますようお願いいたします。

なお、ご所属の異動等により会員情報に変更が生じた場合は、できるだけ速やかに会員情報変更届（学会
web サイト参照）を学会事務局に e メールでお送りください。

2020 年度 総会報告 (8～13 頁)

第 35 回総会は 2020 年 6 月 20 日 (土) にオンライン会議 (Zoom による) として開催されました。中川晶会長の司会進行のもと、会長の開会宣言の後、総会の議長は上杉裕子氏、書記は渡辺理和氏が選出されました。総会では、最初に「①顧問の承認・退任、第 12 期役員の補充、退任 (資料 1)」及び「②会員管理システムを含む学会ウェブサイトの刷新 (資料 2)」の説明が行われ、異議なく承認されました。次に、2019 年度の「③事業報告《第 1 号議案》 (資料 3)」、「④収支決算報告《第 2 号議案》 (資料 4)」が行われ、引き続き「⑤監査報告 (資料 5)」が行われ、いずれの議案も異議なく承認されました。次に、2020 年度の「⑥事業計画《第 3 号議案》 (資料 6)」、「⑦予算案《第 4 号議案》 (資料 7)」の説明がなされ異議なく承認され、総会は終了しました。総会に引き続き、「⑧各支部の研究会報告及び収支決算報告 (資料 8)」が行われました。最後に、2020 年度中川記念奨励賞 (中川賞) の選考結果報告が行われ、中川会長より、受賞者の藤田裕一氏へ賞状と副賞が授与 (後日郵送) されました。

① 顧問の承認・退任、第 12 期役員の補充、退任 (資料 1)

●顧問の推挙 (承認)

Brian Hurwitz (ブライアン・ハーウィッツ) (医学, 英国) (2020 年 6 月 1 日付就任)

●顧問の退任

中島紀恵子 (看護学) (2020 年 5 月 31 日付退任)

●第 12 期役員の補充・退任 (2019 年度総会以降) (報告)

<B 理事の補充> (前回の選挙結果 (得票数) に基づき補充)

元村直靖 (医学) (任期: 2019 年 8 月 18 日～2022 年 5 月 31 日)

<監事の退任>

元村直靖 (医学) (2019 年 8 月 18 日 B 理事就任)

<監事の補充> (前回の選挙結果 (得票数) に基づき補充)

林 哲也 (健康科学) (任期: 2019 年 8 月 18 日～2022 年 5 月 31 日)

<会長任命理事の補充>

大門恭平 (健康科学) (任期: 2019 年 8 月 18 日～2022 年 5 月 31 日)

蓮井貴子 (看護学) (任期: 2020 年 2 月 11 日～2022 年 5 月 31 日)

末松弘行 (医学) (任期: 2020 年 5 月 17 日～2022 年 5 月 31 日)

<評議員の補充>

岡本響子 (看護学) (任期: 2019 年 8 月 18 日～2022 年 5 月 31 日)

蓮井貴子 (看護学) (任期: 2019 年 8 月 18 日～2020 年 2 月 11 日、会長任命理事就任)

東中須恵子 (看護学) (任期: 2019 年 8 月 18 日～2022 年 5 月 31 日)

藤田裕一 (心理・福祉学) (任期: 2019 年 8 月 18 日～2022 年 5 月 31 日)

村上 真 (健康科学) (任期: 2019 年 8 月 18 日～2022 年 5 月 31 日)

上山千恵子 (看護学) (任期: 2019 年 11 月 3 日～2022 年 5 月 31 日)

眞崎由香 (看護学) (任期: 2019 年 11 月 3 日～2022 年 5 月 31 日)

山崎裕美子 (看護学) (任期: 2019 年 11 月 3 日～2022 年 5 月 31 日)

徐 淑子 (社会学) (任期: 2020 年 5 月 17 日～2022 年 5 月 31 日)

<評議員の退任>

蓮井貴子 (看護学) (2020 年 2 月 11 日付、会長任命理事就任)

逸見 功 (健康科学) (2020 年 3 月 31 日付)

北村義博 (健康科学) (2020 年 3 月 31 日付)

末松弘行 (医学) (2020 年 5 月 17 日付、会長任命理事就任)

<委員の補充>

【編集委員会 (常設)】

蓮井貴子 (看護学) (任期: 2020 年 5 月 17 日～2022 年 5 月 31 日)

【広報委員会 (常設)】

大門恭平 (健康科学) (任期: 2019 年 8 月 18 日～2022 年 5 月 31 日)

【中川記念奨励賞選考委員会 (常設)】

元村直靖 (医学) (任期: 2019 年 8 月 18 日～2022 年 5 月 31 日)

【企画運営委員会 (特別委員会)】

大門恭平 (健康科学) (任期: 2019 年 8 月 18 日～2022 年 5 月 31 日)

元村直靖 (医学) (任期: 2019 年 8 月 18 日～2022 年 5 月 31 日)

藤崎 郁 (看護学) (任期: 2019 年 11 月 3 日～2022 年 5 月 31 日)

蓮井貴子 (看護学) (任期: 2020 年 5 月 17 日～2022 年 5 月 31 日)

② 会員管理システムを含む学会ウェブサイトの刷新（資料2）

1. 会員管理クラウドサービス「SMOOSY（スムージー）」の導入

「SMOOSY」は株式会社アトラスの学会に特化した会員管理クラウドサービスで、2020年5月現在、40を超える学会を中心に導入実績がある（準備中含む）。

(1) 学会 web サイトの刷新

- ・セキュリティ強化（常時SSL化はもちろん、官公庁・金融機関等でも導入されている堅牢なクラウドサーバ（AWS: Amazon Web Service）で個人情報等も保護）
- ・スマートフォンなどにも対応
- ・構築・更新等が容易（サーバーやネットワークに関する専門的知識は不要）
- ・容量の大きいPDFファイルなどのコンテンツ（論文等）は既存サーバーで運用可能（現行 web サイトのPDFファイル等へのリンクを形成）

(2) 入会申請・会員情報変更のオンライン化

- ・オンライン入会申請フォームによる入会申込
- ・会員情報の変更は会員自身がマイページで変更可能
- ・申請情報や会員名簿は1つのデータベースで管理

(3) 請求書や領収書のペーパーレス化

- ・会員自身がマイページで請求書・領収書PDFのダウンロード可能
- ・会員マイページでは会費支払状況を会員自身が確認可能

(4) 会費の入金確認・消込のオンライン化（オプション機能）

- ・オンライン決済連携により、銀行振込の入金情報を自動でシステムに反映
- ・会費納入督促メールの一括送信が可能

2. 費用：総額407,000円（税込）（会員数500名とした場合）

(1) 標準機能（初期費用：無料）

- ・年間費用：330,000円（税込）（月額利用料：10,000円+30円×会員数、税別）

(2) オプション機能（別途オンライン決済代行会社と契約）

- ・オンライン決済連携：銀行振込情報自動反映機能（バンクチェック機能）
- ・年間費用：77,000円（税込）（月額利用料：2,500円+決済処理料80円/件、税別）

(3) web サイト移設・構築作業等（基本的に学会 web 担当者が行うが、専門的作業等は別途必要）

3. 導入の流れ（予定）

(1) 2020年7月～9月：現状課題等のヒアリング、SMOOSYでの解決策等の検討

(2) 2020年10月～2021年1月：導入申込・契約、システム構築・設定

(3) 2021年2月～：既存の会員データをインポート

(4) 2021年3月～：本運用スタート

③ 2019年度事業報告（2019年4月1日～2020年3月31日）《第1号議案》（資料3）

1. 第34回学術大会・総会の開催

テーマ：当事者として感じ、語らう ～悠久の都・ならにて～

大会長：梓川 一（東大阪大学）

期 日：2019年6月21日（金）～23日（日）（21日はエクスカージョンのみ開催）

会 場：奈良春日野国際フォーラム「薨 ～I・RA・KA～」本館（奈良県奈良市）

2. 第35回学術大会・総会の開催準備

テーマ：医療者が当事者性を持つことの意義を問う

大会長：安酸史子（関西医科大学）

期 日：2020年6月20日（土）21日（日）（2021年6月頃に延期予定）

会 場：関西医科大学（枚方市・予定）

3. 第8回国際保健医療行動科学会議開催準備

期 日：2021年（予定） 開催地：ホーチミン（ベトナム）（予定）

4. 機関誌（雑誌）の発行

雑誌 第34巻1号『保健医療と行動変容』（2019年6月発行）

雑誌 第34巻2号『当事者として感じ、語らう』（2020年3月発行）

5. 機関誌（雑誌）の発行準備

雑誌 第35巻1号『身体活動と行動科学』（2020年6月発行予定）

雑誌 第35巻2号『（タイトル未定）』（2020年12月発行予定）

6. ニュースレターの発行

第99号（2019年12月）

7. 理事会の開催（6回）

第11期第18回及び第12期第1回（2019年5月26日・大阪）

- 第12期第2回（拡大）（2019年6月22日・奈良・第34回大会会場）
 第12期第3回（2019年8月18日）（東京）
 第12期第4回（2019年11月3日）（大阪）
 第12期第5回（2020年2月11日）（東京）
 8. 顧問・評議員会の開催（1回）
 2019年6月22日・奈良・第34回大会会場
 9. 企画運営委員会の活動等
 教科書の増刷300冊
 質的研究研修会（3日間）の開催準備と一部開催（2020年2月1日）
 学会webサイト刷新の検討とwebでの会員管理システムの導入の検討
 オンライン理事会の開催準備
 10. 中川記念奨励賞の選考（2019年度応募者なし）・募集（2020年度）
 11. 奨励研究員の選考（2019年度応募者なし）・募集（2020年度応募者なし）

④ 2019年度収支決算報告（2019年4月1日～2020年3月31日）《第2号議案》（資料4）

2019年度予算		2019年度決算	
収入の部		収入の部	
(単位：円)		(単位：円)	
年会費 (7000*410,5000*26)	2,700,000	年会費 (7000*429,5000*21,3000*4)	3,120,000
機関誌（雑誌）売上	200,000	機関誌（雑誌）売上	177,372
前年度からの繰越金	2,395,633	前年度からの繰越金	2,395,633
利息・その他	0	利息・その他	0
合 計	5,295,633	合 計	5,693,005
支出の部		支出の部	
(単位：円)		(単位：円)	
機関誌（雑誌）発行費	800,000	機関誌（雑誌）発行費	862,780
印刷費	180,000	印刷費	84,430
人件費 (1,450*6*8*12)	835,200	人件費	835,200
通信連絡費	300,000	通信連絡費	100,607
消耗品・備品費	50,000	消耗品・備品費	0
会議費	800,000	会議費	774,868
第35回学術大会補助費	200,000	学術大会補助費（第35回）	200,000
支部活動補助費	120,000	支部活動補助費	0
学会事務所運営費	0	学会事務所運営費	0
編集委員会費	60,000	編集委員会費	71,454
中川記念奨励賞副賞	50,000	中川記念奨励賞副賞	0
学会webサイト運営費	15,476	学会webサイト運営費	15,476
企画運営委員会活動費	800,000	企画運営委員会活動費	16,500
予備費	1,084,957	その他（慶弔費等）	0
		次年度への繰越金	2,731,690
合 計	5,295,633	合 計	5,693,005

（註：2019年度決算収入の部年会費3,120,000円のうち454,000円は2020年度年会費）
 ※次年度繰越金を除く支出合計2,961,315円（収入合計5,693,005円一次年度繰越金2,731,690円）

<2019年度特別会計>（2020年3月31日現在）

（2018年度末特別会計残高1,838,298円）

事業費積立金残高	1,946,386円	2019年度収入合計471,478（教科書売上111,464円、質的研究研修会参加費（18名・3日分）360,000円、利息14円） 2019年度支出合計363,390円（教科書増刷211,464円（300冊）、質的研究研修会開催費（2/1実施1日分）151,926円）
国際会議積立金残高	0円	

⑤ 監査報告（資料 5）

○2019 年度監査報告

会則第 20 条に基づき、事業報告及び収支決算の監査を実施しましたので報告します。

1. 監査対象 ①2019 年度事業報告 ②2019 年度収支決算
2. 監査報告 上記のとおり、納入、支出がなされ、証拠書類の保存、整理及び帳簿への記帳は良好であったことを承認します。

2020 年 5 月 17 日

監 査 花家 薫
林 哲也

⑥ 2020 年度事業計画（2020 年 4 月 1 日～2021 年 3 月 31 日）《第 3 号議案》（資料 6）

1. 2020 年度総会の開催
2020 年 6 月 20 日（土）（オンライン会議）
2. 第 35 回学術大会・総会の開催準備
テーマ：医療者が当事者性を持つことの意義を問う
大会長：安酸史子（関西医科大学）
期 日：2021 年 6 月（予定）
会 場：関西医科大学（オンライン併用によるハイブリッド開催）（未定）
3. 第 36 回学術大会・総会の開催準備
テーマ：未定
大会長：樋口倫子（明海大学）
期 日：2022 年 6 月（予定）
会 場：東京都内（未定）
4. 第 8 回国際保健医療行動科学会議開催の検討
期日、開催地は未定
5. 機関誌（雑誌）の発行
雑誌 第 35 巻 1 号『身体活動と行動科学』（2020 年 7 月発行予定）
雑誌 第 35 巻 2 号『（タイトル未定）』（2020 年 12 月発行予定）
6. 機関誌（雑誌）の発行準備
雑誌 第 36 巻 1 号（2021 年 6 月発行予定）
雑誌 第 36 巻 2 号（2021 年 12 月発行予定）
7. ニュースレターの発行
第 100 号（2020 年 7 月）、第 101 号（2020 年 11 月）、第 103 号（2021 年 3 月）（予定）
8. 理事会の開催（5 回）
第 12 期第 6 回（2020 年 5 月 17 日）（オンライン会議）
第 12 期第 7 回（拡大）（2020 年 6 月 20 日）（オンライン会議）
第 12 期第 8 回（2020 年 8 月）（オンライン会議）（予定）
第 12 期第 9 回（2020 年 11 月）（大阪・オンライン会議併用）（予定）
第 12 期第 10 回（2021 年 2 月）（オンライン会議）（予定）
9. 顧問・評議員会の開催（1 回）
2020 年 6 月 20 日（土）（オンライン会議）
10. 企画運営委員会の活動推進
・学会 web サイト刷新と web での会員管理システムの導入
・質的研究研修会（3 日間）のうち残りの 2 日分開催（1 日分は 2020 年 2 月 1 日に開催済）
・オンラインシンポジウム等の開催検討
（例えば、新型コロナ時代の行動科学、人工知能、学際的見地による語る・聴く・書くなど）
・雑誌の電子ジャーナル化の検討 ・ニュースレターの電子化の検討 ・役員選挙の電子投票の検討
11. 中川記念奨励賞の選考（2020 年度）・募集（2021 年度）
12. 奨励研究員の選考（2020 年度応募者なし）・募集（2021 年度）

⑦ 2020 年度予算案（2020 年 4 月 1 日～2021 年 3 月 31 日）《第 4 号議案》（資料 7）

収 入 の 部 (単位：円)	
年会費 (7,000*380 + 5,000*8)	2,700,000
機関誌（雑誌）売上	200,000
前年度からの繰越金	2,731,690
利息	0
その他	0
合 計	5,631,690
支 出 の 部 (単位：円)	
機関誌（雑誌）発行費	900,000
印刷費	180,000
人件費 (69,600*12)	835,200
通信連絡費	300,000
消耗品・備品費	70,000
会議費（理事会等交通費 200,000・web 会議 24,000）	224,000
学術大会補助費（会場とオンラインのハイブリッド開催を想定）	400,000
支部活動補助費	120,000
学会事務所運営費（電話代等）	20,000
編集委員会費	200,000
中川記念奨励賞副賞	50,000
学会 web サイト等運営費（サーバー等 16,000・会員管理 407,000）	423,000
企画運営委員会活動費（web サイト移設等 200,000・その他 200,000）	400,000
予備費	1,509,490
合 計	5,631,690

⑧ 各支部の研究会報告及び収支決算報告（資料 8）

□東京支部研究会報告及び収支決算報告（2019 年 4 月 1 日～2020 年 3 月 31 日）

回数	年月日	会場	テーマ（報告者）
第 102 回	2019 年 9 月 28 日（土） 13:00－17:00	東京医療保健大学	テーマ：動機づけ面接入門講座「さあ一緒に動機づけ面接を始めてみよう！」 講 師：瀬在 泉（防衛医科大学校）
第 103 回	2020 年 1 月 19 日（日） 10:00－16:00	東京女子医科大学 看護学部	テーマ：自立・成長を支援するリーダーシップ： ティーチングとコーチングの使い分け 講 師：諏訪茂樹

収入の部		支出の部	
前年度よりの繰越金	192,742 円	研究会講師謝礼	80,000 円
支部活動補助金	0 円	会議費（ミーティング・弁当）	54,579 円
研究会参加費	218,000 円	チラシ印刷費＋郵送費	3,120 円
利息	0 円	雑費および資料コピー代	7,247 円
		次年度への繰越金	265,796 円
収入合計	410,742 円	支出合計	410,742 円

□北海道支部研究会報告及び収支決算報告（2019年4月1日～2020年3月31日）

諸般の事情により、北海道支部研究会は開催せず。収入・支出共なし。（次年度への繰越金 154,931 円）

□近畿支部研究会報告及び収支決算報告（2018年4月1日～2019年3月31日）

諸般の事情により、近畿支部研究会は開催せず。収入・支出共なし。（次年度への繰越金 63,264 円）

◆ ◆ 日本保健医療行動科学会 役員・委員会構成（敬称略，五十音順）（2020年8月1日現在）

第12期（任期：2019年6月1日～2022年5月31日）（顧問は任期の定めなし）

- 〈顧問〉稲岡文昭（看護学），仲尾唯治（社会学），藤崎和彦（医学），南 裕子（看護学），宗像恒次（健康科学），
John Launer（ジョン・ローナー）（医学，英国），Brian Hurwitz（ブライアン・ハーウィッツ）（医学，英国）
- 〈会長〉中川 晶（医学）
- 〈副会長〉諏訪茂樹（社会学），吉岡隆之（健康科学）
- 〈理事〉梓川 一（心理・福祉学），大門恭平（健康科学），岡 美智代（看護学），末松弘行（医学），
高橋裕子（医学），豊田久美子（看護学），任 和子（看護学），蓮井貴子（看護学），
樋口倫子（心理・福祉学），深井稜博（歯学），藤崎 郁（看護学），馬込武志（社会学），
宮本真巳（看護学），村岡潔（社会学），元村直靖（医学），森谷 満（医学），安酸史子（看護学），
- 〈監事〉花家 薫（健康科学），林 哲也（健康科学）
- 〈評議員〉上杉裕子（看護学），大芦 治（心理・福祉学），岡本響子（看護学），小田和美（看護学），
片山英雄（心理・福祉学），上山千恵子（看護学），川村千恵子（看護学），窪田辰政（健康科学），
小林昌廣（健康科学），紺井弘隆（歯学），佐藤富美子（看護学），島井哲志（心理・福祉学），
瀬在 泉（看護学），徐 淑子（社会学），平 英美（社会学），高倉 実（健康科学），
高橋さつき（看護学）高橋 徹（医学），近森栄子（看護学），藤内修二（医学），
西村ユミ（看護学），橋本尚子（心理・福祉学），東中須恵子（看護学），久村正也（医学），
藤田裕一（心理・福祉学），本庄恵子（看護学），眞崎由香（看護学），松田 聡（医学），
松原みゆき（看護学），道信良子（社会学），村上 真（健康科学），村田正章（医学），
守本とも子（看護学），山口 豊（心理・福祉学），山崎裕美子（看護学），吉村雅世（看護学），
渡辺りわ（社会学）

＜顧問 7 名，理事 20 名（会長・副会長を含む），監事 2 名，評議員 37 名＞

【編集委員会（常設）】

樋口倫子（委員長），岡 美智代，諏訪茂樹，任 和子，蓮井貴子，深井稜博，馬込武志，宮本真巳，
村岡 潔，森谷 満，吉岡隆之

【広報委員会（常設）】

馬込武志（委員長），大門恭平，村岡 潔，吉岡隆之
（ニュースレター担当）大門恭平，馬込武志，村岡 潔，吉岡隆之
（ウェブサイト担当）大門恭平，吉岡隆之

【国際交流委員会（常設）】

高橋裕子（委員長），諏訪茂樹，中川 晶，吉岡隆之

【中川記念奨励賞選考委員会（常設）】

安酸史子（委員長），豊田久美子，藤崎 郁，元村直靖（以上，理事から選出）
上杉裕子，高倉 実，松田 聡，道信良子（以上，評議員から選出）

【企画運営委員会（特別委員会）】

中川 晶（委員長），大門恭平，岡 美智代，諏訪茂樹，高橋裕子，豊田久美子，任 和子，蓮井貴子，
樋口倫子，深井稜博，藤崎 郁，馬込武志，宮本真巳，村岡 潔，元村直靖，森谷 満，安酸史子，
吉岡隆之
（教科書企画担当）諏訪茂樹，（「語る・聴く・書く」企画担当）岡 美智代，（AI 等企画担当）中川 晶

2020 年度 中川記念奨励賞を受賞して

藤田裕一（神戸学院大学）

この度は歴史と栄誉ある賞を受賞し、驚きとともに、大変身に余る光栄なことと思っております。選考委員の先生方はじめ、学会の全ての皆さまに心より感謝申し上げます。

この学会との出会いは、私の今や四半世紀を超える仲となった親友を介してのことでした。この親友を通して彼の学部時代の恩師だった谷口文章先生に、そしてこの学会に繋がるご縁をいただきました。生前、私のことを折に触れて深く気にかけて下さり、あたたかくご指導も頂いた谷口先生がもし生きておられたら、今回の私に何とお声をかけて下さったかと想像するだけで、胸が熱くなります。

私の専門は障害者心理学をベースにした障害者福祉です。この学会でお目にかかった先生方のご存知の通り、私は先天性の二分脊椎症に伴う身体障害があり、車椅子ユーザーです。自分自身が障害者の当事者として、障害当事者の研究に携わってまいりました。私は量的研究と質的研究のどちらも行う人間ですが、障害当事者を対象とする研究は調査協力者の人数も少なく、そのため他学会では私の研究を受け容れて下さらないこともありましたが、しかし本学会では、国内そして海外での学会発表や、学会誌への論文掲載を通して、いつもあたたかな励ましのお言葉を頂戴し、特に論文投稿時には当時の査読の先生より、決して忘れられない、今へと繋がる大切な視座を得るきっかけとなったコメントを頂戴したこともありました。

何より、この学会で出会った先生方、皆様が私にとりまして本当にかげがえがありません。近くのことでは、昨年度の奈良大会の実行委員の皆様が今でも忘れられません。

先にも述べました通り私には身に余る賞を賜りましたが、これは多くの皆様との出会いと限りないお支えを頂戴したからこそのことと、改めて深くふかく御礼申し上げます。生前の谷口先生から学ばせて頂いた「謙虚さ」を胸に、今後も真摯に障害者当事者研究に向き合ってまいりたく存じます。本当にありがとうございました。（追伸。オンラインの学会総会における学会賞の表彰式も、まことに得難い貴重な経験となりました。）



☆ 日本保健医療行動科学会「中川記念奨励賞」候補者ならびに「奨励研究員」の募集 ☆

【日本保健医療行動科学会中川記念奨励賞】

中川記念奨励賞の候補者を募集いたします。受賞年度において 45 歳未満の正会員で、保健医療行動科学に関する学術的研究あるいは教育を含む諸活動において、顕著な業績を上げている方が受賞の対象になります。自薦・他薦いずれでも結構ですので、奮って応募してください。応募者は、本学会 web サイトに掲載されている最新(2013.6.22.最終改定版)の「中川記念奨励賞内規」及び「中川記念奨励賞候補者の業績についての選考内規」を参照の上、履歴書及び研究業績リストを学会事務局に送付してください。2021 年度受賞の応募期限は 2021 年 3 月末日です。

【日本保健医療行動科学会奨励研究員】

本学会では奨励研究員の制度を設けています。これは正会員で、関連分野での研究活動を行いながらも常勤の所属に恵まれない方々のために、少しでも社会的不利益を補完・救済することを目的とした制度です。この身分を希望される方は、希望の理由と履歴書及び研究業績リストを学会事務局に送付してください。奨励研究員の呼称を認められた方は「日本保健医療行動科学会奨励研究員」の身分を用いて論文の執筆や学会発表ができます。対象者の年齢制限はなく、任期は 1 年間とし、状況に応じて更新が可能です。審査・登録にかかる費用は無料です。応募期限は特にありません。

● 会員勧誘のお願い ●

会員の皆様には、本学会に興味や関心のありそうな方々に、本学会への入会をお勧め下さいますようお願い申し上げます。なお「日本保健医療行動科学会入会のご案内」および「入会申込書」は、本学会 Web サイトからダウンロードができます。ご協力をよろしくお願い申し上げます。

『下手くそやけどなんとか生きてるねん。』

— 薬物・アルコール依存症からのリカバリー —

渡邊洋二郎 著，現代書館，2019（全 230 頁）

紹介者 評議員 徐 淑子（新潟県立看護大学）

本書は、アルコール依存症をもつ著者による手記である。帯の紹介文には、「精神科病院入退院、48 回。刑務所、3 年服役。『施設太郎』だった私の生き直し（リカバリー）の道。」とある。著者の生い立ちから現在までに至るまでのライフヒストリーと、自己の経験をふりかえって現在思う回復への道のり、精神科医療や専門的援助の在り方への示唆が、気どりのないことばづかいで、生き生きと、率直に綴られている。現在、40 代である著者は、刑務所出所後、依存症回復施設や自助グループ、その他の援助者の手を借りながら依存症からの回復に取り組み、福祉施設の職員として一般就労を果たすまでになっているという。家族関係や依存症という病い、その他のさまざまな困難を乗り越え、自分を新たに見出す。これは、ナラティブ・アプローチでいうところの、ひとつの「探求の物語」*1である。

読者は、書き手が、数々の経験や出会いの中で、自己を知り、他者、そして社会との関係の結びなおしをするさまを、共感をもって読み進めることができるであろう。本書の前半、回復の入り口にたどり着くまでの経過を記した部分で、書き手が他者を傷つける、あるいは書き手が他者より傷つけられる、そして書き手が自分自身を傷つける記述の連続に、圧倒されたとしても。反抗と自傷の末に入れられた刑務所の独房。そこで、著者の眼前に拍動する心臓が現れる。このできごとによって、著者の中に「生きる覚悟」と「生き方を変える決意」が芽生える。このエピソードは、一種の神秘体験であろう。ところが、著者は、以降の記述で、この特殊体験を、再度ふりかえるようなことを全くしないのである。著者に転機をもたらした重要なできごとであるにもかかわらず。このことひとつをとっても、著者が、さまざまな過去の体験の一つひとつを、自らの生活史の重要事件と位置づけながらも、それらにとらわれず、前に進むことをより大きな喜びとしていることが感じ取れる。今やしっかりと地に足がついた、その現実感覚に読み手は安堵を覚えるに違いない。

このように、本書は、読み手、とくに依存症になんらかの形でかかわっている人たちに、希望をもたらす書物であるといえる。しかし、本書にはもう一つ見逃してはならない重要な点がある。著者が、精神科病棟や刑務所でみずから経験したり目撃した、そこへ収容されている人たちへの非人道的な取り扱いについての証言である。読み手は、本書を通して回復することの希望を著者とともに存分に味わうべきである。しかし、その一方で、本書の書き出しで著者自身が記している「非行少年」「依存症者」でもなく「精神科病院の患者」でもなく「刑務所服役者」でもなくそこには「人」がいるのだ、という訴えをなんとか読み手に届けようとする、その未だ若々しい声を、読後も、忘れてはならないと思う。

*1 フランク、アーサー（2002）：傷ついた物語の語り手-身体・病い・倫理、鈴木智之訳、ゆみる出版、東京。

支部活動案内

◎最新の支部活動案内は、本学会 web サイトに掲載しています！

▼第 105 回東京支部研究会 【計画中】

日本保健医療行動科学会 東京支部事務局（樋口倫子）

〒279-8550 浦安市明海 1 丁目 明海大学

Email : nhiguchi@meikai.ac.jp Tel : 047-355-5120（教員代表）

▼第 138 回近畿支部研究会 【計画中】

日本保健医療行動科学会 近畿支部事務局（馬込武志）

Email : jahbs.k@gmail.com（近畿支部専用アドレス）

▼第 63 回北海道支部研究会 【諸般の事情で一時休止中】

日本保健医療行動科学会 北海道支部事務局（森谷 満）

〒002-8072 札幌市北区あいの里 2 条 5 丁目 北海道医療大学病院内科・心療内科

Email : jahbshokkaido@yahoo.co.jp Tel : 011-778-7575（病院代表）

第 35 回日本保健医療行動科学会学術大会のご案内 [2020.8.8.]

- ＜期 日＞ 2021 年 6 月（予定）
＜会 場＞ 関西医科大学（オンライン併用によるハイブリッド開催を検討中）（未定）
＜テーマ＞ 「医療者が当事者性を持つことの意義を問う」
＜大会長＞ 安酸史子（関西医科大学）
＜プログラム＞ 基調講演、特別講演、シンポジウムⅠ及びⅡ、落語公演、
体験学習ワークショップ、一般演題発表

※最新情報は、随時、日本保健医療行動科学会 web サイト（<http://www.jahbs.info/>）に掲載します。

- ＜第 35 回日本保健医療行動科学会学術大会実行委員会事務局＞
〒573-1004 大阪府枚方市新町 2 丁目 2 番 2 号 関西医科大学看護学部内
担当：上山千恵子（大会事務局長）
＜連絡先＞ 電子メールアドレス：35jahbs@gmail.com

日本保健医療行動科学会雑誌「投稿論文」随時受付中（投稿規定が改定されています！）

学会雑誌に掲載する投稿論文は随時受け付けています。雑誌の発行は年 2 回（6 月・12 月の予定）です。投稿原稿の種類は、原著論文、総説、研究ノート、資料、実践・活動報告（新たに追加されました）です。

※投稿規定の主な改定内容及び最新の「投稿規定（2019.06.22.最終改定版）」は、本学会 web サイトの「会則・規約等」のページの「雑誌投稿規定」に掲載されていますのでご確認ください。



事務局便り



- 2020 年度会費（2020 年 4 月 1 日～2021 年 3 月 31 日）及びそれ以前の会費が未納の方は、できるだけ早急にお振り込みをお願い致します。行き違いの場合はご容赦ください。ご不明な点などがありましたら事務局にご連絡ください。
- 2013 年 6 月（第 10 期）以降の理事会議事録及びニュースレターを、本学会 web サイトの会員ページに掲載しています。会員ページを閲覧するためには、ユーザー名とパスワードが必要です。
- 会員情報に変更のある場合、退会する場合は、学会 web サイトから各届出の様式をダウンロードし、各届出に必要事項を記入の上、Email（PDF ファイル）にて事務局に送付してください。（学会 web サイト参照）

<<編集後記>>

これまた難産だった 100 号です。とりあえず、会員の皆様にお届けできてよかったです。

今までのニュースレターとは違う趣向で編んでみました。内容も様々ですし、ベテラン会員と新入会員が肩を並べているところなど、学際的で、多様性を内包した学会であることを再確認できるのではないのでしょうか。ご感想もお待ちしております。（馬込）